

# 織田信長の政権構想

## －「天下布武」の実態をめぐって－

胡 煒権（ウ・ウェイキュン）

### 0. はじめに：信長の評価－魔王から英雄まで

本能寺の変で信長はその嫡男・信忠とともに非業の最期を遂げた。その後、織田政権は崩壊し、織田一族は没落して豊臣秀吉、さらに徳川家康の一介の家臣に転落して小藩として存続した。織田一族の没落につれて、織田信長の面影は薄くなり、残酷面だけが残ることになった。このためか、江戸時代には織田信長の人気は殆どなかったのである。

江戸時代儒教思想は社会に大きな影響を与えていた。儒教は仁、義、礼を人の要綱とし、将軍でも庶民でもそれらを知らなければ、悲運を招いて死ぬと言われていた。つまり、儒教の教義に従わなければ、人間としては失格だと考えられていた。儒学者はその思想を強化するために、江戸時代以前の人物を儒教の標準で批判したが、その一人が織田信長である。その結果、江戸時代を通して信長の評価はますます厳しくなっていた。

まず、江戸初期の儒医・小瀬甫庵が書いた名著「信長記」の最終巻「信長公早世之評」では

孝行の道厚からず、殊に無礼におわせしによって、果して冥加なく早く過させ給なるべし。  
敵国の兵といえ、皆討ち亡さでは叶わざるようにおわしましし。  
信長公御身金石をも欺くほどに、信を堅く守り給いしによって、人の非を以ての外に憎み戒め給えり。

とある。

つまり、信長は孝行を知らず、極めて無礼振りをしてついに神仏の加護を受けずに死んだという。また、敵を一人も残らず討ち滅ぼし、人（家臣）の誤りを非常に憎んだという。これが正しいかどうかはともかくして、江戸初期にはすでに信長を残酷な人間と酷評していた。

さらに、江戸中期以降になると、信長評は初期より厳しくなる。朱子学者で将軍家宣の政治顧問だった新井白石が書いた「読史余論」には「そのことは残忍なりと雖も、長く僧侶の凶悪を除けり。これもまた、天下の功有事の一つと成すべし」と、宗教勢力の一掃、天下統一の功績を褒めるものの、信長評を読んでもみると、

すべてこの人（信長）、天性残忍にして、詐力をもって志を得られき。されば、その終りを善くせられざりしこと、自ら取れる所なり。不幸にあらず。

とある。

つまり、信長の最期は「自業自得だ」と白石が評したのである。加えて、白石は信長が弟の信勝、女婿の松平信康、妹婿の浅井長政を殺し、功臣の佐久間信盛と林秀貞を無情に追放したなどと、次々と批判し、「父子兄弟の論理既に絶えし人也」、「凶悪の人」と辛辣に酷評している。また、信長が明智光秀の謀反によって自害させられたことも「君臣の義」を知らないからだと言いつけている。

江戸後期に移っても、儒学者の信長評は相変わらず酷い。太田錦城の「梧窓万筆」にも、

信長は猜忌、（源）頼朝とり勝れり、その残暴は、頼朝の為さざるところなり。  
局量の狭小なるは、遙かに諸将に劣れり。

とある。

すなわち、信長の猜忌心や残酷さは誰よりも厳しいという。大量の惨殺や敵の朝倉義景と敵に回った妹婿の浅井長政を殺した後、彼らの頭骨を薄濃（漆塗り）にして宴会に据え置き、皆で謡い遊び酒宴を楽しんだという。なお、これを杯にして酒を飲んだともいう。

それが真実かどうかは第一部で詳しく検討するが、以上の史料を見る限り、信長のイメージは時代とともに酷くなっていくことは確かである。もちろん、褒める言葉や評価もあるが、総体的に言えば、信長、特に彼の性格面に対する評価は幕府の政治操作によって厳しかったのである。

ところが、江戸時代から明治時代になると、信長のイメージは劇的に変わったのである。当時の信長＝残酷無残な人間という固定観念に一石を投じたのは江戸晩期の儒者・頼山陽である。山陽はその著書「日本外史」で信長の功績を褒め、「超世の才」とさえ評した。また富国強兵を目指した明治政府とその後の大正政府は山陽のように信長を英雄とし、さらに衰微に向かっている天皇と朝廷の再興を支え、助けていた信長を「勤皇家」として絶賛した。

なお、軍事面に関していえば、明治陸軍参謀部が書いた「日本戦史」では、大軍を持つ今川義元に対し、寡兵しか持たない信長が奇襲をかけて今川勢を打ち破り、敵大将の義元をも討ち取った桶狭間の戦いを奇跡の戦役と評している。さらに、日本史上初めて大量の鉄砲を使い、「三段撃ち」をかけて無敵と言われていた「武田騎馬軍団」を破った長篠の戦いを「従来の戦い方を一変させ、日本の軍事革命をもたらした戦争」とし、この「戦史」によって、信長は後に「軍事の天才」と評されることになった。

宗教政策では、無神論者と言われた信長は戦国大名でも怖がる大きな勢力を持つ本願寺や一向一揆などの宗教集団を次々と打ち破って、後の豊臣、徳川政権の天下統一に大きな

影響を与えたという。また、伝統を無視することで、キリスト教の宣教師に接近し、彼らの力で仏教を牽制しようとした。なお、宣教師から献上された時計、地球儀、地図などに強く関心を持ち、世界は丸い物体であると宣教師が説明すると、家臣は皆理解できなかったが、信長は「理にかなっている」と答えたという。

経済政策では、日本最初の自由貿易政策と言われる「楽市楽座」を創り、寺院、貴族などの旧勢力の特権を取り潰して、中世日本の経済を活性化しながら、それを近世化させたという。さらに、巨大な軍事力と財力をもって兵農分離という政策を進め、武士以外の農民や僧侶の武装を解除した。これは長期戦乱の一因となっていた民衆の武装化を徹底的に排除し、江戸時代の士農工商政策の元になったと言われている。

明治時代から、信長の評価は急速に変わった。もちろん、信長は偉大な功績を刻したものの、彼の性格面に対する非難が変わったわけではない。例えば、家臣明智光秀の謀反の理由は彼と信長の性格の違いに求められ、それに信長の残酷行為で周囲の敵と家臣から恨みを買って、その一人の光秀は耐え兼ねてついに謀反を決意したという。しかし、総体的に言えば、明治、大正、そして敗戦前の昭和時代までは、織田信長は日本史上の天才で、かつ世界史的にも高く評価されていた。

上記のように、江戸時代から近代日本まで、信長評の変化は時代の先入観と政治操作によってかなり激しいが、これは信長を評する難しさを如実に反映したものであると考えられる。では、信長を客観的に評価するには、どうすればいいだろうか。信長がいた戦国時代の実相がわからない以上、信長の行為を適当に判断することは不可能であるので、信長に関連した史料を丹念に検討して分析することが重要であると筆者は考える。

## 1. 信長の諸説と反論

はじめにの部分で述べたように、信長に対する評価の変化はかなり激しかった。これは各時代の思想の違いや政治操作に左右されたものである。明治後期から敗戦前の昭和時代まで、日本の実証史学は飛躍的に進歩したが、信長と織田政権の学術研究は江戸時代以来の通説を無批判に引用しながら、定説化した。当時の研究では、信長は日本史上に偉大な業績を刻した人物でありながら、その性格は残酷、非情、猜疑心が誰よりも強かったことで、終に周囲の敵や不安を持つ家臣から恨みを買って、悲運の最期を迎えてしまったとなっている。そのためか、現代までの信長像は時代によって差異が大きく、なかなか結論を出すことができないのである。

特に敗戦後の学界は敗戦前の「皇国史観」を克服して批判しながら、以前の学術研究を再吟味して反省してきた。学界以外にも、大勢の小説家や評論家は信長について色々な論説を唱えた。それに、日本放送協会（NHK）が製作した大河ドラマやゲームソフト制作会社から発売された歴史シミュレーションゲームによって、信長の人気が一層高くなる一方で、信長の原像も混乱しつつある。一般の評価は信長を「現代の考えを持つ先進的な中世の人間」、さらに「残酷ながら、迷信家でもなく、神も仏も信じない理性的な無神論者」

とも捉えている。ところが、現代では、信長の暴虐な振舞いを大きく非難するとともに、従来の「勤皇家」を否定し、天皇を追放して自分が天皇になろうとした野心家だったという評論も少なくない。無神論、破壊者、革新者、そして野心家、そのような錯綜した評価のなかで、信長の実像をどうやって捉えるべきか。また、以上の諸説はどこまで信じられるのだろうか。ここでは、全ての評論を一つ一つに検討する余裕がないので、最もよく知られた次の三点を取り上げて検討してみることにする。

### (I) 無神論と自我神格化

信長と言うと、一般的には強大な武力を誇る仏教勢力に対する弾圧、即ち比叡山の焼討ちと本願寺一向一揆との対決を挙げることができる。さらに、当時日本に滞在していた宣教師ルイス・フロイスが著した「日本史」では、信長は次のように描写されている：

「彼（信長）は善き理性と明断な判断力を有し、神及び仏のいっさいの礼拝、尊崇、ならびにあらゆる異教的占トや迷信的慣習の軽蔑者であった。形だけは当初法華宗に属しているような態度を示したが、顕位に就いて後は尊大にすべての偶像を見下げ、若干の点、禪宗の見解に従い、靈魂の不滅、来世の賞罰などはないと見なした。」

つまり、フロイスが見た信長は理性と判断力に富み、迷信と神仏を一切信じない人物である。そのフロイスの記録は今や一般の解説書で信長の特徴を説明するのによく引用されている部分である。反仏教の他に、「フロイス日本史」には信長は自我神格化、つまり自分を神とするという記載が次のように描かれている。

神々の社には、通常、日本では神体と称する石がある。それは神像の心と実体を意味するが、安土にはそれがなく、予自ら神体である、と言っていた。

さらに、

信長は自分の誕生日に、己を生き神とする祭典を大々的に催し、武士のみならず庶民の参詣を強要した。その祭典に諸国から信じられないほど大勢の者が集まった。

上記のように、フロイスが見た信長は無神論者から段々自我神格化してくる。神を信じないどころか、自分を神仏としている信長を「狂乱」とフロイスが非難した。仏教に対立する信長の態度を説明するために、「日本史」以外には、後で述べる比叡山の焼討ちと本願寺一向一揆との対決（石山合戦）もよく挙げられる。また、武田信玄が書いた手紙で「天台座主」（天台宗の代表）と署名した。信玄に対抗するため、信長はその返信で「第六天魔王」と署名した（「第六天魔王」とは仏教において、仏道修行を妨げる存在であ

る)。その逸事で、信長には「仏敵」、「滅仏」というイメージが広がっている。

しかし、上記の事例だけで、信長を「無神論者」、「自我神格化した男」と断定することはまだ早計ではなかろうか。

まずは、フロイスの記述を検討しておこう。フロイスは当時の宣教師の中では一番有名であり、強大な大名と対面することもかなり多かった。フロイスの日本語理解力はとても高かったので、信長の言葉を誤解、曲解する可能性は極めて低かった。しかし、誤解しなかったとしても、フロイスの証言を無批判に受け入れることは危険である。なぜなら、当時の宣教師の大名に対する評価基準は落差が大きかったからである。キリスト教に好感を持つ大名には宣教師の評価も高かった。例えば、有名なキリスト大名である大友宗麟はその一人であり、一方、キリスト教を強く弾圧する竜造寺隆信や毛利元就をフロイスは「悪魔」と非難した。従って、宣教師の証言は史料としては信憑性が高いものの、厳密に分析しなくてはならないのである。

では、信長についてはどうであろうか。最初、フロイスの信長に対する評価はかなり高かった。特に、反キリストの朝廷が京都にいる宣教師を全部追放しようとした時に、信長は朝廷の意を無視して宣教師を手厚く保護したので、フロイスら宣教師は「ついにわれらの主は彼（信長）を取り立てた」（『日本巡察記』）といい、本能寺の変後、信長の「自我神格化」を嫌がるフロイスらは、信長の死を知って「ジーザスは彼の死を決めたのです」と言い切っている。言うまでもなく、これはフロイスの主観的な考えから出た言葉であるが、以上を見ると、宣教師の証言の信憑性は高くても、全てを信じてはならないことがわかる。

まず、自我神格化について検討しておこう。先に挙げたフロイスの証言によれば、信長は統一事業がうまく進行している最中、自分を神とし、民衆に参詣を強要しているようだった。しかし、この出来事は日本側の史料には全く見当たらないし、百歩譲って実際にあったとしても、そんなに珍しくないのではないだろうか。なぜなら、自分を神格化しようとする武将は信長だけではないからである。信長の後、豊臣秀吉は自分のことを日輪の子と称しており、徳川家康も朝廷に要請して神号の東照大権現を賜ったからである。むしろ、神格化は中世の人間にとって、権威を誇る手段としてよく使われていた。三人の天下人の他に、中国地方の有力大名である、萩藩の毛利氏でも、一介の国人領主から中国地方をほぼ支配下に置くまで拡大し、最強の智将と謳われる毛利元就を尊崇するため、朝廷に「仰徳大明神」の神号を賜った。備後福山藩の藩祖である水野勝成も、死後にその功績が認められ、朝廷から「聡敏大明神」の神号を与えられている。また、九州随一の大名である島津氏の九州制覇の基礎を築き、中興の祖と称される島津忠良（日新斎）は自らを「在家菩薩」とさえ称していた。豊臣秀吉、徳川家康、毛利元就、水野勝成そして島津忠良、いずれも政治的効果を考え、精神的権威として民衆を威圧したり服従させるために、自我神格化（または後世に神格化された）している。従って、自我神格化が実際にあったとしても、それは信長の単独の発想ではなく、中世の人間にとっても、それは不思議なことではない

のである。不思議だと思っているのは唯一神論を堅信する宣教師たちである。

ならば、信長の反仏教の行為はどう説明すればいいだろうか。比叡山焼討ちと石山合戦は日本人と戦国史を熟知する外国人もよく知っていることであり、当時、それは宣教師以外に、京都の貴族や敵大名らも知っている出来事であるので、二つの事件を否定したり、抹殺することはできない。しかし、問題の中心点は事件の有無ではなく、比叡山焼討ちと石山合戦は信長を反仏教の人間と見做す根拠になれるかどうかということである。結論として、筆者はそれを否定せざるを得ないのである。

まず、比叡山焼討ちの経緯を簡単に顧みよう。元亀元年（1570）、信長は自ら擁立した将軍、足利義昭と対立し、義昭は信長を倒すべく、密かに信長に敵対する朝倉義景、浅井長政と連携して実権を取り戻そうとした。この連携を知った信長は強大な軍力で義昭を脅かし、それと一時和睦した。それで信長は義昭と連携した朝倉と浅井を駆逐すべく大軍をかけて朝倉と浅井に攻めかけた。朝倉と浅井勢は一時比叡山に上り、引き籠もっている。戦況膠着をみた信長は素早く比叡山に自分に対して忠節を尽くすとともに、朝倉と浅井勢を収容しないよう中立を求めた。信長は比叡山がその二つの条件を受け入れれば、「御分国中にこれある山門領、元の如く還付せらるべき」、つまり、昔、取られた比叡山の寺領を還すと約束した。比叡山が断ると比叡山にある寺社、建築物を「悉く焼き払はるべき」（『信長公記』巻四）と、全部焼き払ってやると言い捨てた。ところが、比叡山は信長の恫喝に怯えず、敵対することを決意した。信長は仕方なく比叡山と対峙し続けた。翌元亀二年（1572）、信長は天皇と将軍の力を借りて一時比叡山と朝倉と浅井と和睦する。比叡山は固く断ったが、ついに天皇の要求に応じた。朝倉と浅井勢も和睦により、本国に退いてしまった。これを見た信長はついに自ら和議を破って大軍を率いて突然比叡山に攻めかかった。先の約束通りに、信長の条件を拒否した比叡山は織田勢に攻められ、山上の寺院、建物は全て焼き払われて灰燼の地になってしまい、捕らわれたり、殺されたりした僧侶、老若男女は四千人にも及んだ。焼討ちを知った京都の公家は「言語道断の次第なり（とんでもないこと）」（『言継卿記』）と嘆いた。

比叡山焼討ちの経緯は以上のように一般の解説書に書かれているが、疑問は残っている。まず、比叡山焼討ちが信長によって行われたことは確かだが、初めて神聖なる比叡山に対抗したり攻勢を敢行したのは信長ではなく、室町幕府六代将軍足利義教である。義教は将軍になってから、ずっと比叡山と対立していた。永享七年（1435）、義教は謀略で比叡山の有力僧侶を誘い出して殺した。比叡山は激しく非難したが、ついに屈服して自ら比叡山の根本中堂を焼いて集団自殺した。比叡山は結局炎上して灰燼に帰した（『満濟准后日記』）。続いて戦国時代に入った明応八年（1499）、管領細川政元が廃立した前将軍足利義植を支持しようとした比叡山を攻めて根本中堂は再び焼かれてしまった。三回の焼討ちの本質と目的はやや違うにもかかわらず、初めて比叡山を攻めたのが信長ではないことは確かである。

しかも、最近の発掘調査によれば、比叡山には一部分焼かれた痕跡は確認できるものの、

全焼した痕跡は全くなく、残った文物も殆ど戦国期のものではない。また、大津市史によれば、戦国時代中期には、比叡山の勢力はもう弱まっており、信長と敵対する前年、浅井勢が比叡山に乱入して乱暴したことも公家の日記で見つかった。つまり、信長による焼討ちの規模は思ったより小さいし、当時の比叡山も衰微しており、信長からだけでなく、信長に敵対する浅井軍からの圧迫を受けて進退窮まっていたとも言えよう。

従って、信長の比叡山焼討ちはあくまでも政治的、軍事的な行動であり、初めてのことでないし、特に以ての外のこともない。それをもって信長が反仏教だと判定することはなかなか難しいのである。

では、石山合戦はどうであろうか。以下にまずその経緯を簡単に振り返ろう。

石山合戦とは、元亀元年（1570）から天正八年（1580）にかけての、戦国期の最大宗教武装勢力を誇る浄土真宗石山本願寺及び一向一揆と天下布武を目指す織田信長との長期対戦である。

元亀元年九月十二日、信長と義昭が敵対する三好軍と対戦する際、突然本願寺は寺内の鐘を突かせ、信長と義昭に宣戦して攻撃を開始した。本願寺決起の理由は法主顕如が宗徒に書いた手紙から窺い知ることができる（『明照寺文書』）。

信長上洛につき、此方迷惑せしめ候。去々年以来難題を懸け申すにつきて、随分扱いをなし、彼方に応じ候といえども、その詮なく、破却すべきの由、確かに告げ来り候。

顕如が言った「難題」とは、信長が顕如に軍資金を負担させ、石山から退去するようにと勧告したことである。この文書は元亀元年のものだから、「去々年以来」、即ち、永禄十一年（1568）から信長は顕如にずっとそう要求していたのである。さらに、この文書では本願寺が織田方に恭順の意を示したにもかかわらず、信長が「（本願寺を）破却する」と通告したとある。信長との対戦を決意した顕如は諸国の本願寺宗徒へ檄を飛ばして各地で一揆蜂起させた。本願寺の蜂起を知った信長は「仰天」（びっくり）したという（『細川両家記』）。信長と義昭は急遽朝廷に勅使の派遣を要請し、本願寺にその行動をやめさせようとした。これから、十一年をかける、信長と本願寺が全面对決する石山合戦の幕が開かれた。

教科書、一般向けの本では信長と本願寺との合戦を一般的に「天下統一を進める信長は勢力が日本中に及ぶ本願寺教団を殲滅するつもりである」（『雑説日本史』など）と捉えている。つまり、石山合戦とは天下統一を目指す信長が積極的にその最大の障害と見なす本願寺を挑発して滅ぼす作戦だったのである。

しかし、この通説にはまた問題点がある。本願寺の研究に詳しい神田千里氏が「もし信長が事実本願寺へ破却を通告していたのなら、なぜ義昭、信長軍は本願寺からの攻撃を予測できなかったのか。敵対を宣言した敵に至近距離から不意打ちを受けるとは、軍事の『天才』信長としては考えにくい」と通説へ反論する（『一向一揆と石山合戦』）。これ

は説得力があると筆者は考える。確かに、信長は本願寺に対して石山教坊から退去するように勧告したり、先に引用した顕如の書状には信長が本願寺を「破却すべき」と述べたことが明記されているが、本願寺を滅亡させる意図はうかがえない。また、普通に考えると、信長と対戦するためには、諸国の宗徒に危機感を与える内容が一番よいが、宣戦した顕如が九州、四国の門徒に送った書状には信長から難題の強要が続いていると記されているだけで、上記の如く「信長が本願寺を破却する」という文言は見つからない。それは、顕如が決起の正当性、いわゆる「大義名分」を強調し、門徒を奮起させるために、信長の悪さを多少潤色したのではないだろうか。しかも、当時、日本中に勢力が浸透しており、宗徒が大勢いる本願寺のことを熟知しているはずの信長が何の計画も立てず、挑発をそのまま敢行することも考えられない。

この長期対決の間に、織田軍の家臣、一族が本願寺顕如と呼応する各地の一揆との戦いで多く失われたが、十一年後の天正八年（1580）、ついに優勢に立った信長は全面総攻撃をせず、自ら朝廷に和議勅旨を要請し、本願寺と和議を結んだ。和議に応じた本願寺顕如は信長に降伏し、石山を離れて紀伊の鷲森に移った。その後、顕如の嫡男である教如が一部の残党を率いて抵抗し続けようとしたが、最後は屈服した。これによって十一年が経った石山合戦は信長の勝利として終わった。

和議後でも、信長と本願寺教団との関係は概ね良好だったと見られる。これは、和解後の同年八月に、顕如が信長に絵を贈り物として進上し、信長がこれに答礼していることからわかる（『本願寺文書』）。そして天正九年（1581）三月、信長は本願寺に次の朱印状を出した（同上）。すなわち、

諸国より本願寺の参詣の事、雑賀、鷲森に至り、その煩ひあるべからざるものなり。

これは信長が本願寺宗徒の参詣自由を保障したものである。比叡山と違い、信長は本願寺教団との約束を反故にせず、本能寺の変まで堅く守り続けていった。また、天正十年（1582）二月、顕如のいる雑賀で兵乱が起こった。信長は当地の門徒で兵乱の中心人物である雑賀孫一の要請に応じて、顕如を警固するために家臣を派遣している。この事を見て神田千里氏は「織田政権内部で本願寺顕如と本願寺教団とが重要な地位を占めていることがうかがえる。」（同書）と指摘する。和議後の織田政権が本願寺とは陰悪な関係でなく、おそらく本願寺は織田政権の保護に従属したと見てよい。

従って、この対立を一言で言えば、織田政権が自分に対抗したり、敵対の三好軍に好意を寄せる本願寺を屈服させるための戦争であり、本願寺と信長（そして織田政権）の間には必然の対立が存在してなかったし、信長にとって本願寺を滅ぼさねばならないという理由はないのである。なぜなら、信長は本願寺の勢力を織田政権の下に臣従させ、本願寺と良好な関係を保持して天下統一が円滑に進めば、滅亡させる必要性もなくなるからである。信長が倒された後、織田政権を受け継ぐ豊臣秀吉（豊臣政権）も徳川家康（江戸幕府）も、

そして旧織田系の大名で江戸時代に本願寺の重要拠点であった加賀、能登を支配する前田氏も一向一揆と本願寺に対しては一定の規制と警戒があったものの、政策的には本願寺と友好的な関係を保っていたのである。

石山合戦は「織田政権の本願寺殲滅作戦、中世宗教武装集団を解体させる決戦」と定義されたが、以上の検討を見れば、明らかに誤りである。

なお、前の文でも述べたように、信長は神仏を信じず、自分を神とさえ称する人物とされているが、諸史料から見れば、寺院を破壊するばかりではなく、各地の神社、寺院を修繕していたこともよくわかる。例えば、信長の研究基本史料である『信長公記』巻十二では、天正七年（1579）十二月十日、信長は山崎八幡宮が「既に朽ち腐り、雨漏り、廃壊正体なきとの由」と、「御造営なさるべき」（修繕しなくてならない）と命じた。

山崎八幡宮のほか、石清水八幡宮、伊勢神宮など、全国有数の神社、名刹をも修繕したことがあった。これを見れば、信長を反仏教の人間と判断してはならないことがわかる。

さらに同十年四月、和泉の槇尾寺が信長の指出命令（寺領の土地面積、年貢などの明確報告）を拒否し、武具を着て山下の村口で守りを固めているのを聞いた信長は「詫言申し上げずして、上意に背くは、曲事なり。急ぎ攻め破り、一々頸を切り、焼き払ふべき」と命じた（同上）。

この事件を見ると、槇尾寺事件は政権の命令を拒否する者への対応であり、単に信長が寺院を嫌っていると解釈することはできない。しかも、戦国時代においては、敵に加担する寺院、神社は敵と見なしていたので、攻撃できない、大切に守らなければならない存在であったとは限らないのである。従って、槇尾寺の事件は自分で「天下の儀」を背負うと宣言した信長に対しては、ただ「上意に背く」者を成敗することにすぎず、反宗教の行動とは無縁である。

ここまで、色々な説明をしてきたが、信長が「仏教嫌いではない」と証明できる最も有力な理由は安土城築城である。

安土城は信長が築いた、「天下布武の城」と言われる居城で天正四年（1576）正月に着工し、同七年（1579）に竣工した。しかし、同十年の本能寺の変後、土一揆によって焼亡され、灰燼に帰してしまった。琵琶湖南岸に聳えていた安土城は信長の居城としてよく知られているが、その内部については一般の人間はあまり知らないのである。これは安土城が竣工してから僅か三年で焼亡したので、その関連史料が極めて少ないからである。少ないとはいえ、安土城の記録が残る史料はある。それは本論で多く引用した『信長公記』である。

『信長公記』巻九。「安土御普請の事」と「安土の御普請首尾仕るの事」では、安土城の築城経緯が記され、特に安土城の内部の様子が詳しく記載されている。もっとも注目したいのは五階目の記述である。即ち、「六重目（五階目）〔…中略…〕釈門十大弟子等、釈尊成道御説法の次第」、安土城の五階目では釈尊が釈門十大弟子に説く仏法世界が顕現されていた。そして六階目には「三皇、五帝、孔門十哲、商山四皓、七賢」など古代中国

の先哲が描かれていた。この記載を見れば、信長は中国の哲学と仏教の教義を十分に受け入れるよう（キリストのことが全くなかったが）で、安土城を築城するきっかけとなった自分の信念、思想を示そうとしたのである。信長には宗教を無視する意思はなく、仏教嫌いでもなく、むしろ安土城こそが信長の世界観や精神面を反映する（後述）ものと言えよう。

以上の論考で信長は仏教嫌いではなく、むしろ仏教には好意を寄せる人間だと筆者は考えている。信長は上洛してから、本能寺で倒れるまでの十四年間に、日本を統一するため、中世からの精神的権威である比叡山を攻撃し、そして当時の最大宗教武装集団である本願寺に十年以上の合戦を挑んだ。この二つの事件は従来、信長が無神論者だから、宗教を信じず、仏教勢力と全面的に対決し、そして全ての神々を超えて自分を神格化しようとしたから起こったとの通説があるが、実は違っている。信長は無神論者ではなく、ただ宗教が政治に干渉することが嫌いで、それを排除する、つまり「政教分離」を狙うために比叡山と本願寺との対決を敢行したのである。敵対する宗教勢力と戦いながら、寺院の修繕もしばしば行った。無差別に宗教勢力を弾圧した形跡もなく、比叡山と本願寺を屈服させた後も、それらを徹底的に殲滅する行動もなかった。

## （II）常識にとらわれない革新者

通説では、織田信長は反宗教の人間と言われると同時に、当時の常識にとらわれない「革新者」だとも言われている。そもそも、革新とは「旧来の組織、制度、慣習、方法などを変えて新しくすること」という意味である（『広辞苑』第五版）。つまり、信長は古来の定例を一変しようとした風雲児だと描かれているが、実際はどうであろうか。まずは、前節のように、従来の通説を簡単に紹介して検討しておこう。

普通、信長の革新さと言えば、必ず下記の出来事が挙げられる。すなわち、

（イ）楽市楽座を創り出すこと、（ロ）軍事革命を導き出すこと

### （イ）楽市楽座

まず、楽市楽座について検討しよう。「楽市」とは市場での商人の特権や独占を否定し、自由営業、課税免除を保証した商業政策であり、戦国大名が城下町、港町の建設と発展を推進するために実施する政策でもある。それに対して、「楽座」は朝廷、貴族や寺院の勢力と結託して販売の独占権、課税免除などの特権を保障された中世の商工業者、交通運輸業者などが結成した特権的同業集団である「座」を自由な営業の妨げとして否定した政策である。一般向けの本において、楽市楽座は信長による特権商業否定の政策であり、信長がそれを推進し、日本の中近世商業史に大きな影響を与えたと言われている。信長は楽市楽座を創り出した先駆とされていたが、第二次世界大戦以降、新しい史料の発見により、研究者たちはそれを否定した。信長は各地の既得利益者、例えば、寺院、貴族などの財源

を積極的に破壊した。統一事業が進むにつれて楽市楽座は拡大され、ついには中世の特権商業並びに座組織は徹底的に廃止された。その代わりに、信長は楽市楽座を施行するとともに、関所撤廃も行った。さらに城下町集中政策に乗り出し、家臣を城下に集住させ、兵農分離を促進した。その政策によって商業が自由化され、物流事業が大きく発展し、近世封建制の成立を果たしたという。

しかし、注意したいのは、実際のところ座は存続しているのであるから、楽座はどこまで執行されたかということである。つまり、本当に全ての座特権を廃止する政策を実施したかどうかを再検討しなければならない。

従来、織田信長の楽座（座撤廃）政策の事例はわずか三つしかない。それに、その三つの事例は研究者の間に問題点が多く残っており、あるいは内容が事後の追認にすぎないから、確信性が薄いと考えられる。

座政策については総じて言うと、次の通りである。信長が義昭を擁して上洛した後、幕府が従来先例に倣い、旧来の座特権を認めて存続させたという発給文書がある。脇田修氏は、幕府と対立して義昭を京都から追放した後に築き上げられた織田政権の座政策は「城下町における楽市楽座政策を推進した点で、もちろん幕府とは異なっているが、一般の座政策においては幕府と同様のものではあった」と指摘している（『近世封建制成立史論』）。実際、信長が領国において楽市楽座を推進したことが確認できるが、楽座政策の限界も認められる。管見の限り知り得たところでは、信長の現存文書には、各種の座の存続を認める文書（安堵状）がかなり多い。座の安堵状は永禄十二年（1569）から天正九年（1581）までずっと発給されていた。つまり、織田政権の下で、楽市楽座は確かに推進されているものの、実行範囲は信長の領国に限られていた（実際は領国でも一部の座が存続することが認められている）。座商業の中心地であり、経済の先進地域であった京都や近畿地方などは領国化されておらず、旧勢力（特に公家集団と寺院）の不満に配慮するため、本能寺の変まで、楽市は一部実施されていたのに対し、楽座はあまり推進されていなかったことが判明している。楽座の完成は豊臣政権の成立まで待たねばならないのである。

かくして、従来、旧勢力の不満を無視し、彼らの経済力を奪い、自由貿易の発展のために実行された政策と見なされている楽市楽座は通説と違い、座経済を破壊するどころか、信長は逆に一部の座の存続を認め、さらに本能寺の変までずっと保護してきたことが明らかである。

以上、楽市楽座の実態を明らかにした。それでは楽市楽座と繋がる商業政策である関所の撤廃も簡単に検討しておきたい。関所とはもともと要路または国境に設けて通行人、通過貨物を検査し、脱出や侵入に備えた所である。中世以降、朝廷、幕府、社寺そして土豪は関所で関銭を徴収し、巨大な利潤を得ていたが、関所の設立によって流通が著しく阻害されていた。そのため、戦国大名が領国市場の発展のため、国境関だけを残し、領国内の旧関所を撤廃したことが知られている。信長、そしてその織田政権の関所撤廃は貿易の推進が目的であり、商品流通を円滑に実現するために行われた商業政策である。その意義は

大きいと言えるが、疑問点はまだ残っている。確かに、通説の通りに、信長の関所撤廃は統一政権としての政策なので、戦国大名の関撤廃とは規模がかなり異なっている。さらに、通説では、他の戦国大名と異なり、信長は軍事戦略と経済発展のために積極的に関所を撤廃したことで、先見の明があると言われ、その先見性こそが天下を統一できた所以だとよく言われているが、これは誤りであると言わざるを得ないのである。注目しなければならないのはその撤廃は史料から見ると、楽座と同じで信長の領国でしか行われなかったことである。

本論で何度も引用する信長の伝記である『信長公記』によれば、信長が関所を撤廃したのは明らかである。最初の関撤廃の命令は永禄十一年（1568）十月で、信長は、義昭を擁して入洛した直後、「天下のため」と「往還旅人を憐れむ」ため、領国中の関所を撤廃せよと命じた。それから、翌年の伊勢征伐、天正三年（1575）の越前征伐、そして天正十年の甲斐、信濃征伐の後、征服地に対して関所を撤廃する命令を発したことが確認できる。しかし、注意すべき事は永禄十一年の撤廃令の対象は信長の領国（当時は尾張と美濃だけ）であり、以後の撤廃令もまた新しい征服地に限られ、肝心の京都と畿内地方は対象外なのである。特に天皇と公家の領地である京都の率分関には信長がその存続を認めている。京都の率分関は京都へ入る通路に設けられる関所入口で皇室と公家にとっては重要な収入源であった。室町幕府は京都の七口を率分関として皇室と公家の一部の生活費を賄っていたが、幕府の権威が落ちるにともない、率分関の収入が不安定になったが、信長は入洛してから、それを改めて安堵した。それに対して、朝廷側は感謝の意として信長に折扇を贈り、「よろこひ覚ましめし候」との女房奉書が出されるほどであった。

従って、率分関は信長によって保障され存続したが、これは信長が幕府以来の政策を黙認するだけで、分国での関所撤廃とは矛盾した政策を採ったことを示している。しかし、後述のように、それは政策の不一致さを示すものではなく、むしろ、信長が朝廷、公家を保護するために行った政策の一環と言ってもよからう。

#### （ロ）軍事革命

（イ）において、信長の経済政策である楽市楽座と関所撤廃の通説に反論してみたが、ここでは、角度を変えて軍事面について検討したい。

従来、信長が天下を統一できた要因の一つとしてよく言われているのは彼の優れた軍事能力である。特に彼が初めて歴史の舞台に登場した桶狭間の戦いでは、二万五千人の軍隊を率いてきた強敵に対して「奇襲」戦術をかけ、今川義元の不意を突いて殺したことは奇跡のように描かれている。さらに、甲斐の武田氏との決戦である長篠の戦いで信長は日本史上初めて三千挺の鉄砲を使い、「三段撃ち」をかけて無敵と言われていた「武田騎馬軍団」を大破したことも知られている。信長は「軍事天才」と評され、長篠の戦いは「旧来の戦術に対する新戦術」の勝利、「従来の戦い方を一変させ、日本に軍事革命をもたらした」戦争であると言われ、果ては新時代の幕開けなどと宣伝されるようになった。他にも、

多くの事例があるが、ここでは上記の二つについて検討しておきたい。

まずは桶狭間の戦いから始めよう。現在、桶狭間の戦いの研究には様々な疑問があり、定論がまだ出てこないが、ここでは、この合戦を分析し、そこで信長は本当に「軍事天才」かどうかを検討してみよう。この合戦の発端は従来、天下に号令しようとする今川義元が障害を排除するため、敵対する信長を滅ぼそうとしたことだった。大軍を擁する義元に対し、当時の信長の軍勢はわずか三千人だった。結局、寡勢の信長を軽視する義元は逆に信長の「奇襲」戦術で殺されてしまった。そして桶狭間の戦いで勝利を収めた信長は数年後上洛し、天下布武を号して統一戦を開始した。そういう経緯で、信長が義元を倒してから、自ら上洛して天下人になったことは当然の流れであり、彼の使命だと言われているが、これは明らかに結果論にすぎない。

桶狭間の戦いの最大の焦点として注目を集めているのは信長の「奇襲」戦術である。通説では信長は義元が自分の居城である清洲城以南の桶狭間で休憩していることを察知し、義元の不意を突くため、密かに軍勢を率い、わざと行軍路線を大幅に迂回したと言われている。さらに、突然の大雨のおかげで、今川勢に全く発見されることなく信長の兵は義元の本陣に辿り着き、義元を殺してその首を討ち取ったという。

この経緯は明治旧陸軍参謀本部編の「日本戦史」が発行されて以来、定説とされ、信長「天才」説が成立した要因と見られる。しかし、戦後の研究者は「戦史」の記載に疑問を提起し、特に「迂回奇襲説」は史料の根拠が欠け、現場での検証や物理的合理性が不足しているため、否定されるようになった。迂回奇襲説の代わりに登場したのが、一級史料である『信長公記』や古地図を参考にして提示された正面奇襲説である。その理論を簡単にまとめると、信長がわざと行軍路線を大幅に迂回したのではなく、大雨のお陰で、義元軍の先鋒を突破して義元の本陣に到着し、乱戦の中で義元を殺したというものだ。正面奇襲説が登場して以来、桶狭間の戦いに関する研究は活発になり、その後も様々な説が提起されるようになった。

迂回奇襲であれ、正面奇襲であれ、検討したいのはこの作戦が特別な戦争であるかということである。確かに、信長が約十倍の敵軍に挑戦して敵大将まで倒したことは見事な作戦であるが、戦国史を総覧すると、特別な事例とは言えないし、これをもって信長が軍事天才だと言うのは早計であろう。桶狭間の戦いの前にも、奇襲戦はたくさんあった。たとえば関東随一の大名である北条氏康は河越合戦という戦いにおいて奇襲をかけ、河越城を包囲している敵軍を打ち破り、敵大将まで討ち取った。中国地方では、毛利元就は少数の軍隊をもって敵の武田元光を討ち取った。さらに、九州の名将である島津義弘は僅か三百人で三千人の伊東義祐軍をほぼ殲滅した。いずれも戦場の地理条件や敵の状況を掌握してから奇襲を敢行したものであった。これらの戦争を見ると、桶狭間の戦いの勝利は奇跡と言ってもよく、珍しくないものである。

次に長篠の戦いについて見てみよう。長篠の戦いは天正三年(1575)に起こる織田信長の対武田氏の合戦であった。旧日本陸軍参謀本部編の『日本戦史 長篠役』が出版されて

以来、長篠の戦いは「新戦術の鉄砲隊対旧戦術の騎馬隊の対決」という図式が定着していたのである。それに、信長は日本史上、そして世界軍事史上初めて大量の鉄砲を巧妙に「三段撃ち」で勝利を収めたことで世界級の軍事天才であると絶賛されていた。このような「伝説」は人々に大きな影響を与え、誰もがそう思うようになった。しかし、研究者たちは、様々な反論を提出し、従来の「神話」を科学的に再検証している。以下では研究者の成果を参考にしながら、「神話」を検討してみよう。

まずは長篠の戦いの「神話」の誤りから始めよう。先にも述べたように、長篠の戦いは「鉄砲隊対騎馬隊の対決」と言われ、新しい武器である鉄砲を使った織田勢に対して、敵方の武田勢は「伝統」の騎馬隊戦術をもって応戦したと言う。さらに、武田氏は「鉄砲の威力を知らず軽視したので、ついに惨敗してしまった」という批評がある。つまり、信長が武器に関心を持ったのに対して、武田勝頼は伝統に盲従して新武器の鉄砲に無知だったのである。しかし、このような批判自体にも大きな欠陥があることは明らかである。

結論としては武田氏が鉄砲には無関心だったという批判は誤りである。なぜなら、史料を見ると、武田氏が鉄砲に関心を持っていた事が確かだからである。

弓、鉄砲は肝要に候間、長柄、持ち鎗などは、これを略しても、知行役の鉄砲不足に候、向後は御用意の事。ついたり、薬の仕度あるべし。鉄砲持筒一挺のほかは、然るべき放し手を召し連れるべきの事。（「山梨県史資料編中世 II」所収文書）

これは長篠の戦いの七年前、武田信玄が家臣の市川新六郎にあてた文書である。内容は信玄が新六郎に弓と鉄砲が重要なので、これからも用意しておかねばならないこと、さらに、鉄砲の薬、つまり火薬の準備、そして良い鉄砲の射手（鉄砲兵）を連れてくるように要請したものである。武田氏が鉄砲には無関心という批判が誤りであることはこの内容を見れば一目瞭然であろう。

また、武田騎馬隊についての記述も誤りである。なぜならば、昔の日本国内の戦争には騎馬隊の集団作戦が存在していなかったからである。有名な源平合戦の騎射戦でも、実は規模が小さな個人戦闘で軍団と呼べるようなものとは言えないのである。さらに、今までの発掘と出土成果によれば、日本産馬は馬格が貧弱で、背が低く（約120センチ）、足が短いので、短距離の疾走ができないものであるし、戦闘員はこれに騎乗して戦うこともできないのである。言い換えれば、日本産の馬は戦闘には不向きである。また、戦国大名である武田氏は騎馬戦が得意だという史料も一つも見つからないし、武田側の史料である甲陽軍鑑の記載にも騎馬戦を否定できる部分がある。すなわち、「武田軍の大將や役人は一備えの中に、七人か八人が馬に乗り、残りはみな馬を後に曳かせ、槍をとって攻撃した。」とある。一備えとは大体千人ほどの規模であり、つまり、千人毎に僅か八人が馬に乗り、他の戦闘員はいざという時には馬から下りて歩きながら戦うのである。

ところが、織田側の史料では、このような記載がある。

(徳川) 家康、滝川 (一益) 陣取りの前に、馬防ぎの為め、柵をつけさせられ… (下略)

これは『信長公記』巻八の「三州長篠御合戦の事」にある記載である。決戦前に信長は家康と一益に馬を防ぐために柵をつけよう命じた。そして、交戦中には

関東衆、馬上の攻め者にて、是れ又、馬入るべき行にて、押し太鼓を打ちて、懸かり来たり、  
人数を備へ候。

武田方には騎馬の者がいて信長、家康側に繰り返して懸かってくるということである。これを見ると、武田勢にはやはり騎馬隊が存在するのではないかという意見もある。しかし、騎馬隊の攻撃を備える馬柵があっても、武田軍は全体が騎馬軍隊、または大規模の騎馬軍団をもつわけではない。武田氏の軍事編成を見ると、騎馬の者は僅か8%で、大規模の騎馬隊はあるはずがないし、百歩を譲っても『信長公記』の記述をもって騎馬隊が存在するとしても、軍事編成を見れば人数が少ないと言わざるを得ない。

上記の引用部分に注目したいのは「関東衆」なのである。『信長公記』を見ると、馬に乗りながら攻めかかって来るのは「関東衆」であり、全体の軍団ではなかった。言い換えれば、騎馬隊はただの一部隊にすぎないのである。筆者は自ら長篠の戦場を視察してみたが、戦場の幅は狭く、『甲陽軍鑑』の記述のように「馬を十騎と並べて乗る所にてなき」であり、やや広い部分は戦場の南、すなわち家康、一益側の本陣に当たる所である。つまり、信長から見れば、平地にある家康、一益隊は騎馬隊の攻撃に遭う恐れがあるので、馬柵を付けるように命じたのであろう。この騎馬隊の攻撃というのは「関東衆」を指すのではなかろうか。

さて、信長の鉄砲作戦はどうであろうか。これも間違いと言わざるを得ない。まず、鉄砲の数量は従来三千挺と言われているが、歴史研究家の藤本正行氏は、これは後の改竄で実は千挺が正しいとした。問題の焦点は当時の織田軍団に三千挺の鉄砲が持てるかどうかということであるが、残念ながら、数量をはっきりと記載した史料がなく、確認できないが、信長が長篠の戦いの前に、家臣の細川幽斎と筒井順慶から数百人の鉄砲手を徴用すると記した書状と記載が残っている。これを見ると、当時の軍団は鉄砲隊の人数が三千人とは思えないし、戦場の現場状況を見ても、三千人の鉄砲隊を並べて置ける場所ではないから、藤本氏の見解に従いたい。

また、伝説の「三段撃ち」戦術にも疑問がある。従来、「三段撃ち」戦術が記述されたのは、後世の軍記である『信長記』が最初と思われる。『信長記』が何を参考にして「三段撃ち」を記載したのかわからないし、また、信長が三段撃ちを命じたとする史料も見当たらないし、証明できる側面史料もないので信用性が低いとされている。さらに、軍事専門家が三段撃ちを実験してみると、素早い有効な攻撃ができないどころか、大量の硝煙が

産生する欠陥が顕れるので、三段撃ちの可能性自体が低い。

それでは、長篠の戦いをどう扱うべきであろうか。一部の推論もあるが、織田対武田のその決戦は信長が巧妙に武田軍を引き込んで大量の鉄砲を使用して勝利を収めたものには違いない。しかし、そのキーポイントは武田勝頼の無知ではなく、また、伝説の三段撃ちでもなく、実は信長の戦略が功を奏したのである。その戦略とは、開戦の前に、徳川家康の家臣、酒井忠次と自分の家臣である金森長近を別働隊として武田軍の後方を奇襲したことである（『信長公記』）。後方が壊滅させられた武田軍は前後の挟撃に陥ってしまい、連合軍の陣地を突破するしかなくなった。しかし、別働隊を派遣した信長は既に本陣を普請して、嚴重に守りを固めていた。従って、激突の最中、武田軍は連合軍を突破することを「宛ら城攻めの如く」と嘆いた（『甲陽軍鑑』）。そして、戦後に出した勝頼の文書にも、信長が「陣城を構え籠もり居り候」とある（『真田家文書』）。戦場の跡にも、陣城の遺構もはっきり見え、『甲陽軍鑑』の記述を裏付けている。以上から見ると、武田軍の壊滅は三段撃ちのためではなく、むしろ前後の挟撃に陥って突撃を敢行したものの、連合軍の堅い守備と千挺の鉄砲の射撃に遭い、多くの死傷を招いたのではないだろうか。

以上をまとめてみると、武田の騎馬隊が存在していたことは疑問であり、実際に存在していたとしても、僅か一部隊にすぎず、長篠の戦いは武田騎馬軍団を破った戦争と見なす事ができないのである。勝利の要因は斬新な新戦略を使ったことではなく、地理条件を活用し、敵の後方を奇襲しながら、自分の陣地に堅く防備を敷いて武田軍を引き出したことである。結局、織田と徳川連合軍は鉄砲と陣城を併用して武田軍の攻撃を防いだのである。これが長篠の戦いの真実であり、奇跡のような勝利ではなく、世界最初の新戦術を使用したものでもなかったのである。

### （III）天皇になろうとしたのか

信長のもう一つの定説は彼が天皇と朝廷を潰し、自ら天皇になろうとしたことである。はじめに述べたように、戦前までの信長像は非情、残酷な人間ながら、勤皇家として絶賛されていたが、戦後以降は百八十度の大逆転になってしまった。その理由は戦後の史学界が王朝史観を反省し、それに基づいて勤皇家の信長を再検討し、勤皇家の代わりに、野心家という結論を導き出したからである。野心家説の論点は信長と朝廷との対立にあったのである。例えば、無理やり天皇を退位させようとしたこと、馬揃えをもって朝廷を脅しながら、自分の強さを誇示したこと、一人の親王を自分の養子とし、将来それを天皇として擁立し自分の地位を高めようとしたことなどが挙げられる。要するに、野心家説は信長を朝廷の敵として扱い、忠実な勤皇家を否定しているのである。

野心家説に基づいて、一部の研究者はそれを自我神格化と結び付けている。信長の死、即ち本能寺の変を、信長からの圧迫に耐えられない朝廷が明智光秀を利用して信長を倒す陰謀としている。しかし、問題の根本は、信長が本当に朝廷の敵であったかどうか、そして彼が天皇になりたかったかどうかということである。それらの議論は現在のドラマにも

影響を及ぼしているが、結論的には以上の推論は飛躍しすぎたものと言わざるを得ない。

なぜなら、信長は上洛して以来、朝廷をずっと助けていたからである。信長が現れるまでの朝廷は、応仁、文明の乱でほぼ滅亡寸前の状態に陥ってしまい、財源をほとんど失って天皇の飲食をも確保できない有様であった。信長は上洛後、すぐに朝廷の荘園を確保し、天皇の賄いとして多額の金銭を献上した。それに、公家と寺院の所領も安堵され、以前武士に奪われた領地も還付された。これを見ると、信長は朝廷と公家にとって破壊者ではなく、むしろ救世主ではないだろうか。一方、信長を恨み、不満を持つ人がいないわけではない。たとえば、信長がキリスト教の宣教師を手厚く保護することを厳しく非難した公家である竹内三位は信長を「木から落ちた柿と同然」と揶揄したが、ついに信長に殺されてしまった。さらに、比叡山焼討ちを知った公家も信長の振舞いを「言語道断」と嘆いた。

信長の勤皇的な行動に対して、朝廷は信長に官位を授けたが、信長は突然に退官してしまった。その理由は研究者の間では定論がずっと出されていなかったが、野心家説の研究者は信長の退官は朝廷から独立した地位を保ち、自分が天皇を超える地位に就きたい気持ちの表れであるとしている。しかし、その時代の官位はそんなに重要なものではないし、権限をも持たない名誉にすぎない。信長自身が天下はまだ統一していないことを退官の理由として明言したので、それを無視するわけにはいかない。

さて、前述の馬揃えはどうであろうか。馬揃えとは、織田政権が天下統一を円滑に進めていた天正九年二月と三月に行われた軍事検閲式である。従来の説では、信長は馬揃えを示威行動として天皇の退位を迫ったといい、自分の軍事力を示して天皇を脅したとした。その説に対して素朴な疑問がある。すなわち、なぜその時、天皇に退位を迫ったのかということである。もし本能寺の変がなかったら、天下統一が続いていくはずだし、信長には時間的余裕が充分あったからである。さらに、当時の天皇はすでに老年の境に入り、譲位の叡慮を馬揃えの前に表明していたので、天正九年に突然退位を迫ること自体が不自然であり、その時に天皇を脅す必要も考えられないのである。本当に天皇、そして朝廷を敵として扱うなら、今までの財政的援助を停止し、それをもって天皇を脅したほうが良いではないか。

上洛から十三年、信長は天皇の権威の神聖さを十分に知っていたはずであるし、天下布武を号して以来、窮境に陥った時は、しばしば朝廷の権威を借りてより有利な条件で相手と講和してきたからである。比叡山と本願寺との講和はその例に属する。従って、信長は朝廷の名義と授權をもたずに征伐をすることができないと言ってもよい。「天下のため」とか、「天下の御忠節」とよく強調している信長は天下が天皇を抜きにしては語れないことをよく知っていたはずである。これまで信長が天皇になろうとしたという史料や形跡が全くなかったので、天皇になろうとする説は、やはり陰謀論にすぎず、説得力を欠いている。

最後に本節をまとめておきたい。ここまで以前から伝えられてきた信長の諸説を検討してみた。織田信長は長期の戦国混乱を鎮めて天下を統一しようとした戦国大名である。彼

の取った方法は同時代や後世の人々から非難を浴びたが、その中には偏見、先入観が充満しており、客観的評価が欠如していた。以上、史料や歴史家の研究を参考にし、従来の通説を再検証して反論を導き出した。要約すれば、信長は無神論者ではなく、彼は仏教神道を尊重しながらも、中国の文化にも関心を持っていたことは明らかである。比叡山と本願寺への弾圧は仏教嫌いのためではなく、むしろ信長は、政治に干渉する宗教勢力をどうしても排除せねばならないものと考え、それを屈服させたものである。それらを自分の下に置くことができれば、必ずしも滅亡させる必要はなかった。本願寺はその例に当たるのである。

革新者という評価について言えば、信長は楽市楽座政策を大きく進めていたが、通説のように、旧勢力の財源を強制的に奪い取るつもりはなかったのである。財源を潰すどころか、逆に信長は公家の領地と荘園を手厚く保護して安堵した。さらに、楽座は京都など伝統勢力の中心においては実施されておらず、従来の座は信長が死ぬまで保護されていた。それから見ると、信長が伝統を否定していたという通説は再検討せねばならない。

軍事革命についても信長は他の戦国大名と異なり、優れた軍事能力を持ちながら、新武器には関心が深かった。従って、十倍以上の兵力を持つ今川義元を奇襲して倒し、それに、天下統一の中、鉄砲を活用して武田氏を長篠の戦いで殲滅することができた。しかし、先に検討したように、信長には優れた軍事能力があったが、奇襲で敵を倒す事は特に珍しいことではなかったし、また、戦場で鉄砲を大量に使用することも当時としては珍しい事ではなかった。ただ、信長が巧妙に地理条件を利用し、敵を誘い出して一撃で倒したことは彼の優秀さが遺憾なく発揮されたことを示している。

天皇になりたかったという説も、当時の貧乏な朝廷にとっては信長が朝廷再興の希望の存在であったから出たきたものだ。信長と朝廷の間には対立があったものの、総じて言うと、朝廷と信長は相互共助の間柄であり、朝廷は信長がいなければまた貧乏に戻る恐れがあったし、それに対して信長は朝廷の大義名分を受けなければ天下統一の土台が崩され、天下布武が失敗する恐れがあった。言い換えれば、信長は旧勢力を破壊するために生まれた風雲児ではない。かれは応仁の乱後の混乱を収め、朝廷と寺院を下に置き、武士を中心とする武家政権を再建しようとした人である。

前述のように、信長という人物を評価するのはなかなか難しいが、偏見と先入観を排除すれば、信長の実像を抜き出すことができないわけではない。

信長の人物像について検討した後は、彼の創った織田政権について考察していきたい。

## 2. 信長の目指したもの—天下布武の実像をめぐって

前章では、信長に関わる諸説を検討し反論してきた。ここでは信長が築き上げた織田政権について分析していきたい。

織田政権は信長が義昭を擁立して上洛させることに成功する前に計画していたものである。つまり、信長は最初から義昭を擁立するつもりはなく、時機を見て義昭を捨て自ら武

家政権を築き上げようとしていたのである。だから、信長に関連するドラマも、小説も義昭の存在を傀儡と見なし、信長が上洛してからも義昭には信長に対抗できる力がなく、彼に対して唯々諾々としながら、裏で信長を倒す陰謀を謀っているという構図が描かれてきた。しかし、そういう通説は一つの大きなミスを犯している。それは義昭と彼の幕府を研究せずにそのまま義昭の幕府政権を信長の下に置いてしまったことである。つまり、義昭と室町幕府は信長に従属するものとして見られ、その存在感が薄められてしまったのである。

幸いな事に、義昭と彼の室町幕府の実態については奥野高広氏や脇田修氏などの研究によって明らかにされたので、以下はその研究成果を参考にしながら、織田政権の創立の過程を見てみよう。

### (I) 織田政権の性格

これまで、学界では織田政権の歴史的な性格についての論争が数多くあったが、結論はまだ出ていない。織田政権の歴史的意義については結びに譲るが、ここでは政権の成立原理と政策面の先進性について織田政権の性格を論じてみよう。

まず、織田政権の性格を分析する前に、その成立過程を検討してみよう。織田政権の成立のきっかけは言うまでもなく、天正元年山城槇島城に籠城し、終始信長を倒そうとしていた義昭が味方の武田信玄の病死を知り、織田軍に降服して都から追放されてしまったことである。この時から信長と義昭の敵対関係は本能寺の変までずっと続いたのである。

信長の前に義昭は対抗できる術もないように見えるが、実際はそうではなかった。それは元亀戦乱の過程を見ればわかる。信長は朝倉義景、浅井長政、三好三人衆、松永久秀、本願寺などの強敵と対戦する際に、義昭の存在とその権威を仰いで、幕府の権威をもって自分の征伐に大義名分をもたらすことができた。さらに、窮境に陥った志賀の陣にも、信長は義昭と朝廷の力を借りて朝倉・浅井や比叡山と講和できた。特に義昭が信長の願いに応じて朝廷を動かしたことは注目すべきである。この事から見ると、義昭の存在は信長の傀儡に過ぎないとは言えないことがよくわかるであろう。

また、通説に従えば、信長は自らの戦争のために幕府を自由に使えるはずだが、脇田修氏の研究によれば、畿内地方を転戦していた信長はしばしば幕府の軍勢に敵軍を挟撃して欲しいと要請したことが史料に見られる。当時の信長は畿内で自分の軍隊だけでは足りないことがわかっていたので、幕府の出動を要請しなければならなかったのである。その幕府軍を出動させることができる人間は義昭にほかならなかった。従って、その要請には二つの意味がある。一つは信長がその時には幕府を我が物のように動員することができず、義昭の手を借りねばならなかったこと。もう一つは、その時、義昭とその幕府は織田軍からは独立な存在であり、織田軍と同一視することが不適切であったということである。

義昭とその幕府が信長の傀儡ではない以上、信長が義昭を勝手にすることはできないし、逆に義昭は信長に反抗する事が可能だったのである。実際、義昭は将軍に就任してから、

近臣に領地を与え、自分の土台を築いており、朝廷、寺院にも良い関係を保っていた。信長にも副将軍や管領の就任を進めたが、信長は断った。その時の信長は義昭から任せ置かれた「天下の儀」の代理人として幕府を含む「天下の取沙汰」を代行することになり、「誰々によらず、上意を得るに及ばず」と自由に行動することができた。しかし、逆に言えば、義昭がいない限り、信長が天下に号令する正当性は一切認められないのである。こんな実力と影響力を持つ義昭は信長との関係が険悪になった後、各地の大名に信長を倒すことを要請し、いわゆる「信長の包囲網」が形成された。義昭に従属することを避けながら、信長はそれを押し返さなければならなかった。従って、本願寺を除き、各地の敵対する大名からの脅威が少なくなった元亀四年には、信長は義昭に「異見十七箇条」を送った。その内容は、義昭が將軍らしくない振舞いを繰り返し、各地の批判が絶えないので、義昭のことを「悪き御所」と呼んでいたというものである（「信長公記」巻六）。信長は異見書で義昭の不正を批判しているが、彼に敵対する正当性を作ることこそが本当の狙いだったのであろう。義昭の振舞いがよいかどうかはともかく、この事件から見れば信長が義昭を勝手に片付けられなかったことが明らかである。勝手に片付けられないので、義昭を倒す名義がなければならなかったのである。

以上から見れば、上洛した後に成立した幕府は信長の物でなく、足利・織田連合政権と言った方がよいであろう。信長は元亀四年までには義昭と訣別した。「織田政権」を築こうと思っていたかどうかは判明しないが、織田政権の成立は室町幕府と義昭が京都から退去するまで待たねばならなかった。

義昭とその室町幕府を追放した後、信長の織田政権はついに成立したが、問題はまだ残っている。それは政権の成立名分なのである。義昭の室町幕府は南北朝時代から天皇、そして朝廷からの正式授権を受けて創立された武家政権であり、正当性を持つ合法政権である。それに対して、信長とその織田政権は天皇の授権を受けていた室町幕府を退去させて自立する根拠と正当性はどこにもないのであった。

従来、武家が自ら政権を築き上げれば、二つの道しかない。一つは平清盛のように、自分の娘や一族の女を天皇の皇后として王宮に送り込み、天皇家の親戚になって政権を握る正当性を獲る。もう一つは源頼朝と足利尊氏のように、強大な軍事力をもって朝廷から授権をもたらし幕府政権を築いて朝廷とは共存の関係を保持しながら、独自性を保つことである。しかし、信長が存在した戦国時代は平清盛がいた平安時代とはかなり違っていたし、鎌倉時代以来、幕府から完全に離脱して自立した政権が全くなかったので、織田政権の成立は武士の時代には初めてであり、その歴史的特異性もそこにあった。

それでは、日本史では初めて現れた織田政権の性質をどう見るべきであろうか。筆者はそれを平氏政権でもない、幕府政権でもない「新武家政権」と考えている。その新しさとは、単に昔の武家政権と異なるだけでなく、その成立の正当性も単に武力から求められるものでもないのである。実際、義昭の退京後、信長は「天下のため」、「天下静謐」を理由として政権を運営し続け、義昭の存在を否定しないながら、独自の政権運営を始めた。

中国地方で延命している旧室町幕府に対して、京都を手中に収め、安土を拠点とする織田政権が誕生した。つまり、日本国内に両政権の対立局面が起こったわけである。本能寺の変まで、義昭の将軍位が朝廷に否定されていなかったのに、室町幕府が名義的だけでも存続していることは、織田政権に敵対する諸大名がそれを認めていたことによって肯定できる。一方、織田信長の政権が日本を支配したり、敵大名を征伐する正当性を敵である将軍が在位していることによって承認しにくく、それが織田政権のもう一つの特別な性格であり、その限界でもあった。

## (II) 信長の『天下』 奉公主義

義昭を退京させた信長は日本（実際は本州中央部だけ）を支配し始めた。しかし、先に言ったように義昭が逃亡しても、室町幕府が滅亡したわけではないし、朝廷から義昭を朝敵（朝廷及び天皇に不忠、敵対の者を指す）とする論旨が一度も下されなかったのに、当時の義昭とその幕府は現在の言葉では「亡命政権」と呼ぶべきであろう。従って、信長とその織田政権は中央部を支配し、そして諸大名を屈服するためには支配の理由、つまり、正統性を強調せねばならなかった。従来、この「正統性」を表すために、信長が当時流行していた「源平交替説」を利用し、勝手に自分の苗字を「藤原」から「平」へと変え、平家の子孫として源氏の正統である足利将軍を倒すことが正当な行為となるという通説が流されてきた。しかし、信長が平氏を称したことは本当だったが、それだけで正統性を獲得できると解釈するのは具体性を欠くし、早計な話ではなかろうか。私は平氏改姓より「天下奉公主義」を打ち立てたことの方がもっと説得力が増すのではないかと思う。

信長の文書で、「天下」という言葉が使われているのは50点以上に及ぶ。「天下」とは古代中国の政治思想で、皇帝が天命を受けて支配する対象(国家)を「天の下」と呼ぶ。その政治思想は中国から日本に導入された。それ以降、天皇、将軍が支配する政治的世界、あるいはその世界を支配する権力が「天下」と呼ばれ、その「天下」を支配する人は「天下人」と呼ばれた。

信長が初めて「天下」を使ったのは義昭を擁して上洛する直前の永禄十一年七月に上杉謙信（当時「輝虎」と名乗る）に宛てた書状である。信長は「公方（将軍）の御入洛」並びに「天下の儀」に関して謙信に「御馳走」を依頼している。それから義昭が退京するまで、信長は大名に宛てた書状には「天下」をよく使っている。義昭と不和になった後、和議を結んだ時も、信長はそれを「天下は再興する」とし、義昭が槇島城に籠った事を「天下を捨て置かれた」と非難した。その「天下」は室町幕府およびその所在地である京都と一体のものと思われるが、「天下」の概念と定義が変わらないわけではない。特に義昭とその幕府が退京した後に京都を掌握した信長は義昭の行為を「公儀の御逆心」と責めている。幕府がもはや「天下」の代名詞ではなく、ここの「天下＝公儀」は幕府を超える抽象的存在とするべきであろう。

義昭と完全に決裂した天正年間において、「天下」の定義はまた変わっていった。当時、

信長は奥州の伊達輝宗に連絡し、「天下に対する御入魂」を理由として敵に回った上杉謙信に対する挟撃戦略を要請した。また、豊後大友氏と薩摩島津氏の対戦に対して信長は和平工作に乗り出しながら、両氏に敵の毛利輝元と戦うように協力を求めた。その際には、信長は「別しての御入魂は天下に対する大忠たるべし」と述べている。つまり、伊達氏が織田軍とともに上杉を挟撃することは「天下」のためであり、大友と島津が和睦し、毛利と戦う事は「天下の大忠」というわけである。その「天下」を支配し、代表するのは幕府でなく、織田政権なのである。

以上から見ると、信長が使う「天下」の意味は段階性がある。室町幕府からその上に存在する「超然的、公有的『天下』」を経て、織田信長が支配する地域、いわゆる織田政権は「天下」の代名詞となった。その「天下」の原理を体現するのは「武篇道」である。

「武篇道」は「武者道」ともいい、簡単にいえば武士の道理とその精神、つまり「奉公」と「文武両道の嗜み」を意味する封建的主従の関係を貫徹するものであり、天下平和を実現するためには大切なものである。家臣の柴田勝家に与えた「越前国掟」に信長は勝家に「第一武篇簡要に候」、即ち武篇道をしっかり守ることを求めるわけである。

「天下」と「武篇道」は織田政権から言えば日本全土に及ぶが、実は信長が支配する地域にしか意味を持たないものであった。前章で述べたように、信長が室町将軍に代わって日本を支配する正当性は全くなかったため、その「天下」論理はあくまでも信長の私物であり、その支配権を正当化させるため作られたものにすぎなかった。

ところが、当時随一の実力者として天下を統一する信長がいる限り、その根拠のない「天下論」は成立し、日本人を納得させるものになった。従って、信長は本能寺の変まで「天下」の名義を自由に使い、敵を征伐する名目だけでなく、家臣、そして朝廷の過失を責める基準ともなった。たとえば、家臣荒木村重の謀反の際には、信長の出陣命令に公然と違反し伊賀を攻めて失敗した息子の信雄に対し、この謀反を鎮める出陣は「第一に天下のため」だったとし、信雄の無断出陣は「誠に天道も恐ろし」と叱責している。

総じて言えば、天下のためには個人と地域の独自性を否定し、「天下」への奉公第一主義というべき論理であった。この天下を代表したり守る存在は信長自身である。従って、「天下」への奉公は信長への奉公と等しいもので、信長が天下を守ると強調しても裏では自身に絶対的忠誠を求めることにすぎなかった。だから、信長の「天下」への奉公第一主義は国内の統一戦争への参加を諸大名から農民まで強制し、それによって諸大名の自立性を否定して信長への服属を迫る。この絶対化は新たな権力構造を作り上げる役割を担うことであり、政権の存在を肯定して絶対化するために信長は新たな政治支配の理念を打ち出したと読み取れる。

しかし、皮肉にも信長が打ち出したこの天下への奉公第一論理は前述のようにあくまでも私有的なものにすぎず、信長が嫡男の信忠とともに本能寺の変で倒された後、織田政権を守り続けるのが柴田勝家しかいなかった。その後、柴田勝家を破った羽柴秀吉によって織田政権の崩壊が始まり、その「天下」への奉公主義は結局織田政権の内輪の争いによっ

て崩壊してしまった。諸大名の戦乱が続き、本当の平和は信長の後を継ぐ秀吉を待たねばならなかった。織田家は後に秀吉の庇護を受け、江戸時代になると、小藩として存続が許された。「天下」を手に握る天下人は秀吉、そして徳川家康と移り変わっていくのである。

### 3. 結び：「天下布武」の底力

ここまで織田信長とその政権について色々分析してきた。織田信長とその政権は上洛して以来十三年を経て突然滅亡してしまった。しかし、この十三年が日本の歴史にとって大きな意味を持つことは歴然としている。ここでは結びとして織田信長とその政権の歴史的意義、すなわち「天下布武」の真価を論じてまとめたい。

織田信長は尾張の一介の大名から身を起し、周囲の強敵を次々と倒していった。そして力を蓄えてから後、亡命將軍義昭を擁して上洛を果たした。応仁、文明の乱以来、果てしのない混乱で廃墟となった京都は平和と繁栄をもたらしてくれる人物を待っていたが、その人物が信長であったと言っても差し支えないであろう。上洛を果たした信長は崩壊寸前の朝廷を助け、その再興を図っている。一方、上司であり主君でもある將軍義昭を守りながら、政治の主導権をめぐる政争によって信長は不本意ながらも室町幕府と決別し自立した。それで織田政権が歴史的舞台に登場してきたのである。

織田政権は室町時代までの旧制度を破壊し、新たな形態として日本を近世化させる役目を負っているとしばしば指摘されている。確かに、上洛してから、朝廷公家が激しく反発するにもかかわらず、信長は耶蘇会の宣教師を手厚く保護しており、伝教の自由をも認めてやった事は朝廷と対立していたようにも見えるかもしれない。しかしながら、朝廷の財政を貧乏から救い、天皇権威の再確立に尽力したのも信長であり、公家社会の回復も信長によって果たされた。従って、旧制度を破壊するというのは織田政権の目的ではなく、むしろ、朝廷を保護し、自らを朝廷の守護者として秩序を再建しようとしていたのである。いや、朝廷だけでなく、秩序を再建するには、寺院、他の武士集団＝大名を自分の号令に従わせねばならなかった。これこそが「天下布武」の目指していたものだとは筆者は考えている。つまり、「天の下に武を布く」とは武力で反対者を討ち果たすという意味ではなく、「天下は武家が握っている」というのが本当の意味ではないだろうか。つまり、天下の主権は武家＝武士にほかならない。万事は武家が決め、武家のリーダーは織田信長が自任している。そのような自負を持つことこそが信長らしい振る舞いではないだろうか。

天下人は、反抗する者を成敗しなければならない。信長は目の前に現れた敵を容赦なく次々と打ち破り、諸大名、宗教勢力を誇っていた本願寺、比叡山、そして將軍の義昭に対してまで討伐戦を繰り返していた。しかし、敵対大名と違い、本願寺、比叡山など信長を絶体絶命の窮境に陥らせた宗教武装集団に対して、強く弾圧しながらも、信長はその存続を認めている。そのような対応からみれば信長が通説のような反宗教者ではないことは明らかである。天下を代表する武家の絶対的主導権を握る信長に服従すれば、滅亡させる必要もない。つまり、朝廷も寺院も天の下を守る武士の総領である信長に服従しなければな

らないのである。それが信長が死ぬまで貫徹していた主張である。この主張は「公武一体」として江戸時代まで続いていった。

日本中世史上最大の勢力圏を築き上げた織田政権はついに新たな政策を打ち出し、新秩序を立てようとしていた。ところが、織田政権の政策は通説に反し、政策の新鋭さが一部認められるものの、決して旧中世封建社会を大改造させるものではなかった。楽市楽座を勢力圏内でしか行わず、朝廷、公家の既得利益を守るため、関税や座の存続をそのまま認めていた。織田政権が中世封建社会から脱皮できなかつたことはその限界の表れである。しかし、これは信長の出身を考えれば極めて自然なことであったし、十余年で千年以上累積していた社会問題を一変させ、改造しようと強要すること自体が無理ではなかつたのかと筆者は考える。

織田政権は当時の社会問題を解決しないまま、突然崩壊してしまつたが、朝廷の保護、積極的に封建権力を集中させる方針、そして残つた遺産と成果は乱世に終止符を打ち込み、後の豊臣政権、そして江戸幕府に引き継がれることになつた。織田政権は日本を近世化させ得なかつたものの、近世への道を開いたという点で評価に値する。言い換えれば、織田政権なしに豊臣政権は戦国時代を終わらせることができたかについては疑問が残るところである。

信長は英傑という呼び方に相応しい男に違いないが、彼は強烈な個性を持ち、家臣には絶対的忠節を要求する絶対専制君主でもあつた。前掲の「越前国掟」にはこんな文言がある。すなわち、

とにもかくにも我々を崇敬して、影後にても仇に思ふべからず、我々ある方へは、足をも刺さざるやうに心持ち肝要に候、其分に候へば、侍の冥加有て長久たるべく候。

とにかく信長を崇敬し、影でも仇に思つてはならない。自分(信長)の方へ足を向けないようにする心がけがあつたら、武士として長く栄えるだろうというのである。この文からも信長が家臣に絶対的忠誠心を求めていた事が明らかである。

しかし、これは当時一般的な思想であり、特に新しいものでもないだろう。信長がそう言つても家臣たちが唯々諾々と服従するとは限らない。たとえば、後に信長に追放された重臣佐久間信盛が信長の責めに激しく反論して「左様に仰せられ候とも、我々ほどの内の者は持たれ間敷」、つまり「そうおっしゃつても、俺たちぐらいの家臣を持ってないだよ」と自慢して、信長が激怒したことがある。また、上杉謙信を征伐する際、羽柴秀吉は柴田勝家と口論した末、無断で撤退してしまつた。信長は立腹したが、秀吉が別の戦功を立てたため、ついに無断撤退の罪を咎めなかつた。さらに、信長を奇襲して倒したのはまた家臣の明智光秀であつた。以上からもわかるように、信長は絶対君主になろうとしたが、ついに失敗してしまつたのである。信長の優れている点は身分を問わず、有能な人材を数多く登用したことである。絶対的忠誠に与えられるのは御恩、つまり、領地の賞与であ

る。前掲の「越前国掟」には「武篇励み候ても、恩賞にすべき所領これ無きと諸人見及びハバ、気には勇も忠義も浅かるべきの条、其分別尤に候」とある。つまり、武功を立てるように命じて恩賞に当たる土地がないことを見せれば、勇氣と忠心の気持ちも浅くなるというわけである。信長は無理やりに家臣に忠心を求めるのではなく、相応しい恩賞がなければ、誰でも忠誠を尽くせないことを十分知っていたのである。

江戸時代から、君主への絶対的忠誠心は教条化されていた。君主は君主らしくなくても、家臣が反抗するわけにはいかないというように君主には没我的献身が強制されたのである。それに対し、信長は家臣の武功に対しては恩賞を忘れる事が無かったのである。

天下布武を号した信長は残酷、非情と酷評されながらも、徹底した合理性と現実主義で織田家を強大化させ、さらに新事物への強烈な好奇心や深い知識欲、そして優れた国際感覚と斬新さで厳しい戦国乱世を勝ち抜いていったのである。また、通説によって信長の人物像は混乱させられているが、実際のところ、信長は意外に政治的対応が冷静であり、慎重な人間であったことを本論で明らかにした。天下布武は本能寺の変によって未完のまま歴史から消し去られたが、こういう特徴を持つため、織田信長、そして彼の織田政権は今でも人々を魅了している。このような魅力を持った人物は日本の歴史の中では類を見ないと言っても過言ではなからう。

#### 参考資料：

- 池享「戦国・織豊期の武家」と天皇一校倉書房 2003
- 磯貝正義、服部治則・注釈「甲陽軍鑑」（戦国史料叢書）人物往来社 1965
- 太田牛一・著、桑田忠親・注釈「信長公記」（戦国史料叢書）人物往来社 1965
- 奥野高広「増訂織田信長文書の研究」上、下、補遺一吉川弘文館 1989
- 奥野高広「足利義昭」（人物叢書）一吉川弘文館 1990
- 神田千里「一向一揆と石山合戦」一吉川弘文館 2007
- 木戸雅寿「よみかえる安土城」一吉川弘文館 2006
- 谷口克広「尾張織田一族」一新人物往来社 2008
- 谷口克広「検証本能寺の変」一吉川弘文館 2007
- 内藤昌「復元安土城」一講談社 2006
- 藤木久志 編「織田政権の研究」（戦国大名論集⑩）一吉川弘文館
- 藤木久志「天下統一と朝鮮侵略」一講談社 2005
- 脇田修「織田信長一 中世最後の覇者」中央公論新社 1987
- 脇田修「織田政権の基礎構造一 織豊政権の分析①」一東京大学出版会 1984
- 脇田修「近世封建成立史論一 織豊政権の分析②」一東京大学出版会 1979